令和６年１月校長メッセージ

「私たちは 21 世紀を“人道支援の世紀”と呼べるようになるか？

Will we be able to call the 21st century “The century of humanitarian aid”？」

新しい年を迎えました。今年もよろしくお願いいたします。
今年は元旦早々から能登半島で大きな地震があり、また、羽田空港では支援物資を運ぶ海上保安庁の航空機と JAL の旅客機とが衝突する大きな事故もありました。亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りいたしますともに、被災された方々にお見舞いを申し上げます。

さて、1 月のこの稿では「私たちは 21 世紀を“人道支援の世紀”と呼べるようになるか？」ということを書きたいと思います。

過去の各世紀を「何々の世紀」と呼ぶことは、それぞれの立場や研究内容に基づいて、多く行われていることです。
例えば、19 世紀を「科学技術の世紀」と呼んで、科学や技術の分野で重要な発見や発明があったことを評価し、人類の文明や知識が大きく進展した時代であったと称賛する考え方があります。
19 世紀の科学と技術の発見や発明について具体的な例は、ダーウィンの進化論、メンデルの遺伝学、パスツールの種痘研究、レントゲンのエックス線の発見、電話、電信、エンジン機関の発明などきわめて多数を例に挙げることができます。

20 世紀の呼び方はいくつかの言い方がありますが、「戦争の世紀」という残念な呼び方をする人が多いのは事実です。

20 世紀以前の戦争が主に 2 国間で行われ、一般市民にとっての戦争は遠い戦場で行われるもので、戦争と市民生活とを切り離すことができました。けれども、20 世紀には世界大戦が 2 回も発生し、利害関係がある複数国間で長期間に渡って戦争状態となり、全ての国民を巻き込んで、全ての産業が戦争遂行に総力を挙げる事態となりました。
そして何より 20 世紀の戦争には大量殺戮兵器が出現し、大勢の市民が戦争の被害者となりました。狂信的な思想や長年の怨恨から、高い殺傷力をもつ兵器や化学物質を使用して、敵対する民族、部族を全滅させようと試みたり、異なる宗教、異なる政治信条をもつ人々を無差別に殺戮したりするといった、巨大な戦争犯罪、政治犯罪が頻発し、被害者である人々の人間の尊厳（human dignity）が損なわれる状況に追い込まれる事態が、世界中で発生しました。

こうした状況から、人間存在の意義や根源的な在り方を問い直す哲学が生まれ、その代表的な哲学は実存主義と言われるようになり、世界の人々のものの考え方から文化、政治に大きな影響を与えるようになりました。

2 回目の世界大戦は 1945 年に終了し、それ以来人類は最終兵器である核兵器の使用に怯えながら、冷戦時代と冷戦終了後の時代を生き延び、21 世紀を迎えました。
この間、戦争、紛争、内戦は世界各地で継続的に行われました。戦争の形態も国同士の戦争だけでなく、対ゲリラ・対テロ戦争、ネットワーク上で攻撃を行うサイバー戦争・IT 戦争など多種多様となりつつあります。
そして、20 世紀末から現在まで、イラクのクウェート侵攻に始まる湾岸戦争、ユーゴスラビアに対する NATO の空爆といった複数国が関わる戦争をはじめとして、南スーダンやコンゴといったアフリカ各地で起きた内戦、アフガニスタン紛争やシリアでの内戦、現在進行中の中東ガザ地区での戦争、ロシアとウクライナの戦争などが継続的に発生し、こうした戦争がいつ複数国に波及、拡大し、世界中が巻き込まれた戦争となる可能性は常に存在しています。

繰り返しますが、20 世紀から今世紀にかけて度重なって発生した戦争は、幾多の悲劇を生み、人間の尊厳を破壊し、人々が「人としてこう生きたい」とか、「幸せに暮らしたい」という願いを踏みにじってきました。
そして、人間の尊厳を保つことができなくなる要因は、現在は戦争だけでなく、気候変動による災害や、今回のコロナのような疫病によるパンデミック、差別や格差による生活基盤の破壊など、新たな要因が生まれ広がりつつあります。

こうした状況に対して、世界は第二次世界大戦以降、人道支援（humanitarian aid）の仕組みをつくって、遅ればせながら戦争や紛争に巻き込まれた人々や、災害によって被害を受けている人に救いの手を差し伸べる取り組みを進めています。
特に 21 世紀では、20 世紀以上にさまざまな積極的人道支援の活動が始まっているように感じます。

そもそも人道支援の考え方は、1853 年のクリミア戦争時のナイチンゲールにさか上ると言われています。ナイチンゲールは戦争で傷ついた将兵を敵味方関係なく治療しました。現在の世界各地で行われている人道支援は、国連機関によるもの、民間団体によるもの、各国政府の機関によるものなどいくつかの種類に分類されます。

国連の機関として人道支援を行う組織は、国際人道問題調整事務所（ＯＣＨＡ）、 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR)、国連児童基金（UNICEF)、国連世界食糧計画（WFP）があり、それぞれが設立の経緯をもち人道支援を行っています。人道支援に国連だけでこれだけの組織を必要とするのは、人道支援が必要となっている国や地域におけるその事案の発

生原因や現に起こっている問題が複雑に入り組んでいることや、支援を必要とする内容が事案ごとに異なっていて、きわめて具体的であることによるものと考えます。
私たちが特に大きく認識している人道支援は難民支援で、小石川の授業の中でも、ディベートのトピックとして「日本はシリアの難民を積極的に引き受けるべきかどうか？」を生徒たちは議論しています。
私たちが難民問題に大きな興味関心がある理由として、1991 年より 10 年間国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）の高等弁務官を務めた緒方貞子氏の存在があります。
イラク、ユーゴスラビア、アフリカなどで戦争や内戦により難民となった人々の支援のため、難民キャンプを飛び回って解決に努力したこと事績が知られています。
現在では、国家間紛争によって国境を超える難民よりも、宗教や民族対立などによる国内難民の人数の方が多くなっているということです。

私たちが知っておく必要のある人道支援の世界的な取り組みの一つに、2016 年にトルコイスタンブールで世界人道サミットが開催されたことです。
この会議では世界 55 ヵ国の首脳、政府関係者と 173 ヵ国の人道支援関係の人が参加しました。サミット期間中はさまざまなレベルでの会議が開催され、潘基文（パン・ギムン）国連事務総長による成果の報告として、「後回しにしない教育」基金の創設－危機下の子どもと若者に対する良質の教育を支援する、「大取引（Grand Bargain）」－危機対応への投資の効率と効果を高める、「グローバル準備パートナーシップ」－危機のリスクが最も高い国のうち、20 カ国の準備態勢を整える、「レジリエンスのための 10 億人連合」－全世界のコミュニティの安定化に向け、10 億人の動員をめざす、ことがサミットのまとめとしてコメントされました。

さて、ここでこの稿のタイトルに戻ります。「私たちは 21 世紀を“人道支援”の世紀と呼べるようになるか？」というのがこの稿のテーマです。2024 年となり、21 世紀となって 4 分の 1 が過ぎようとしています。21 世紀は何の世紀と呼ばれるようになるだろう。もしかしたら「AI とシンギュラリティの世紀」と呼ばれるかもしれませんし、「気温上昇と気候変動、海面上昇の世紀と呼ばれるかもしれません。「戦争と紛争、難民の世紀」と呼ばれるかもしれないし、「大きな貧富の格差、教育格差が拡大した世紀」と呼ばれるかもしれません。

しかし、今現在、世界のどこかで人間の尊厳を守るために、人道支援を行っている人たちが大勢いることが、さまざまな大きな困難を抱えて現代を生きる私たちにとって、人類の未来の希望の光であるように思います。

能登半島で起きた大きな地震の被災地に対して、人道支援の申し込みが複数国、複数団体、大勢の人々からあったという報道を目にしました。私たちは希望の光の中にいる、そしてこの希望の光を私たちも世界に広げていかなければならないと思います。